



発行所 倉賀野神社  
〒370-1201  
群馬県高崎市倉賀野町 1263 番地  
電話 027-346-2158  
FAX 027-346-2184  
例祭（秋季大祭） 10月19日  
春季大祭 4月19日  
公式ホームページ www.chinju.info/

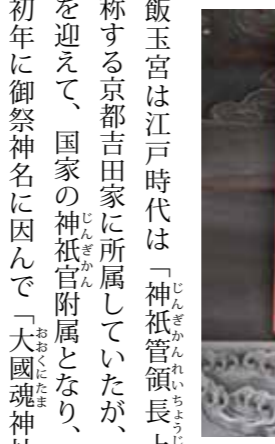
額の裏面には「享保十九載甲寅仲冬十九日」（一七三四）とあり、社内に現存する額の中でもっとも古い。裏面には奉額者として「児玉党倉賀野氏流淡路守藤原尚勝五世孫金井十兵衛勝禧」を始めとする一統の名前が連記されていて、先祖の金井（倉賀野）淡路守が永禄年間に社殿を造営したこの神社に、子孫の繁栄を祈念して額を奉納するという文面が刻まれている。



「飯玉大明神」（拝殿内）  
倉賀野神社（江戸時代までは飯玉宮と称した）には、その時代時代に、様々な扁額（へんごう）が掲げられてきた。そのうちから、二面を見上げてみる。

### 奉納扁額

額の表には「佐文山」の落款がある。高松藩に仕えた高名な書家である。武蔵国一宮水川神社の一の鳥居近くの石標（享保七年建立）にも「佐々木文山」の名が見える。没年は享保二十年（一七三五）



五月で、七十七歳と長命だった。額は文山の最晩年の書といえよう。  
「倉賀野神社」（拝殿正面・左）  
飯玉宮は江戸時代は「神祇管領長上」を称する京都吉田家に所属していたが、維新を迎えて、国家の神祇官附属となり、明治初年に御祭神名に因んで「大國魂神社」と社号改正した。さらに、神社整理政策により明治四十二（一九〇九）年から四十三年にかけて近隣の神社三社を合併したに伴い、「倉賀野神社」と改称した。



平成28年春季大祭「浦安の舞」  
（倉賀野中3年生）  
あめつちの神にぞいのるあさなぎの海のごとくに波たため世を皇紀二千六百年（昭和15年）を奉祝し、昭和天皇御製に作曲作舞した神楽舞である。

○御祭神は大国魂大神。大国主命の荒御魂といわれ、医薬の神・縁結びの神として名高い。  
○起源 今から二千年の昔、第十代崇神天皇の御代、国中に悪疫が広まり、帝は倭大国魂神に祈願してようやく国家の災厄を鎮めることができた。やがて皇子の豊城入彦命は父帝から東国の平定を命ぜられる。出立のとき、帝から御愛石（大切にしていた亀形の自然石）を授けられた。社伝によれば、命は陣中すなわち今の境内に松樹をお手植えになり、都から捧持してきた亀石を御霊代として祭祀がおこなわれた。御霊代は倭大国魂神の御分霊と伝わり、「御神体のクニタマさま」として今も御本殿に奉安される。  
○大同2年（807）、坂上田村麿が東征凱旋の途次に造営舞楽を奏上。神社に伝わる社宝「翁面」はこの故事に由来するという。上野国神名帳に正五位上大国玉明神とある。近隣一帯は神社にちなんで「宮原荘」とよばれた。現在の高崎市「宮原町」の町名の由来である。  
○建長5年（1253）倉賀野氏の始祖倉賀野三郎高俊が社殿を造営。以後、倉賀野氏の氏神として社殿の建替、修復が繰り返された。倉賀野氏は武蔵七党

### 倉賀野神社 御由緒略記

とよばれる武士団の一つ児玉党の余流で、利根川支流の烏川北崖上に倉賀野城の砦を構えた。至徳3年（1386）倉賀野三郎左衛門尉盛勝社殿建立、長禄2年（1458）倉賀野三河守行政社殿建立、永禄2年（1559）金井淡路守社殿修復。  
○江戸時代の倉賀野は中山道の宿場とともに、利根川舟運最上流の河岸として栄えた。神社は倉賀野宿と近隣七ヶ郷の総鎮守「飯玉大明神」として崇敬を集めた。延享4年（1747）御本社造営。寛政元年（1789）御本社修復。現在の御社殿は、元治2年（1865）3月に上棟式、翌慶応2年9月に遷宮式が行われた。  
○明治初年に大国魂神社と改称。神社整理政策を受けて同42年から43年（1910）にかけて近隣の三社を合併、倉賀野神社と改称した。  
○天明5年（1785）の神輿、同7年の雲竜図（狩野探雲画）が御宝物として伝わるほか、旅籠の飯盛女奉納の石玉垣が残る。御本殿（附 造営古文書）と算額が市指定重文。境内に「飯塚久敏と良寛の碑」。飯塚久敏は幕末期倉賀野出身の国学者・歌人で本殿造営寄附帳の序文を著している。天保14年（1843）の著書『橘物語』は世に数ある良寛伝の嚆矢とされる。

### 鎮守のたより

クスノキ

平成二年に「群馬県及び高崎市修景美化事業」で境内に植樹された。いつの間にか大木になっていた。楠（クスノキ）は温暖な地域に分布する常緑樹で北関東のこの辺りが北限ともいわれる。枝の折れ口からは独特の強い香りがする。樟脳をつくるものである。



奥にしずまるのは境内社の冠稲荷神社。狐がお稲荷様の眷属として、控えている。

編集後記▽近くの群馬県立博物館がこの七月にリニューアルオープンした。近世の常設コーナーに、元禄期の中山道の倉賀野宿と河岸のジオラマ（立体模型）が展示されている。▽烏川の流は今とは少し異なっていたようだ。家並みも文書や絵図をもとに忠実に再現され、折しも日光例幣使の行列が行っている。宿と河岸を結ぶ「牛街道」も通っている。江戸時代の倉賀野が、人と物の流れの結節点だったことがよくわかる。▽上の木戸近くには鎮守の飯玉宮が鎮座し、中心部には商家や遊女が参拝した稲荷さまがあり、川岸には船頭が無事を祈る神社が見えた。人々の暮らしが伝わってくる。▽三百年を超える年月に想像力をかきたてられ、知らず、皆じつと見入ってしまうのだ。（直）

ごあいさつ 宮司 高木直明

氏子、崇敬者の皆様には予て神社の護持運営に御理解と御協力を賜わり、ありがたく厚く御礼申し上げます。

御本社正面の鳥居を見ますと、「明治百年記念 昭和四十三年十月吉日再建」と刻銘があります。明治維新から百年が経ち、人々は氏神様の御神恩に感謝するとともに、先人の努力に思いを致し、ふるさとや国家のこと、そして遠く未来に心を向けたことでありましょう。当時まだ子供であった小職にも、「明治百年」のときの記憶があります。

さて平成三十年には、明治百五十年となります。神社では「天明神輿」御神幸祭を始め記念の事業を計画しているところです。国の安寧と皇室の弥栄を心から祈念申し上げ、皆様と共にその佳節をお迎えしたいと存する次第であります。

### やるベンチャーウィーク 中学生の神社体験

ことしも恒例の「倉賀野中学校やるベンチャーウィーク」が実施された。消防署や動物病院など様々な事業所で職場体験を行う中で、期間中に二年生九人が神社の一日体験をした。

六月十四日の生徒五人の一日を見てみよう。午前九時半に集合して、庭掃きと草取り。十時半、たまたま、中山道を歩くツアーの一行が神社に到着。旅人たちと一緒に宮司の案内を聞いた。十一時からは作法の実習。正座やお辞儀の仕方などを体験した。

昼は各自が弁当を用意してきてくれる。練習しておいた食前感謝の和歌をまず奉唱する。先導する一人が続いて、一同で声に出して歌うのである。「た



中山道を歩くツアーの人々と。生徒の笑顔の出迎えに、旅人も笑顔に。

なつもの百の本草も天照らす日の大神の恵み得てこそ」続いて「いただきます。そして食後感謝。「朝よひに物くふごとに豊受の神の恵みを思へ世の人」「ごちそうさま」。本居宣長の和歌である。昼休みには生徒たちの歓声が聞こえてきた。

午後は切り込みを入れた和紙を折ってつくる、「紙垂」作り。これは神事に使う大切なもの、という説明に、一同神妙な面持ちで取り組む。続いて「大祓詞」奉唱の稽古。この長い祝詞を声に出して、二度、三度と繰り返すと、さすがに溜息が漏れてくる。

趣を変え、我が国最古の楽器ともいわれる「和琴」を体験することに。怒れる大蛇が琴の音を聞いて、龍に化身し、天に昇る姿を描いた「飯玉縁起彫刻」が社殿にある。今朝、皆で見たばかりだ。順番に、琴軋とよばれるへら状のピックを手に六本の絃をつま弾いてみる。一人一人が、遙か古代人の心と響き合う瞬間とも見えた。このあと皆で拜殿に昇殿し、大祓詞を神前に奉唱する。午後三時、一同あいさつ、解散。

後日、生徒の手紙から。「大祓詞がすごく大変だった。ツアーの出迎えあいさつがとても楽しかった。いろいろな人とふれ合うことができました。」

### ■修繕日誌

▼拜殿北側妻の懸魚彫刻が落下、修理  
左写真に見る通り、懸魚の彫刻部材（ひれ）が屋根下に落下しているのを発見（五月）。残念ながら彫刻の一部に欠落があったものの、元の位置に復元することができた。



拜殿の屋根を見上げると、懸魚の左側のひれが落下している。現在は復元している。

落下した懸魚の「ひれ」



### ▼本殿周囲の瑞垣の屋根を修理

前号（社報六十号）で報告した本殿周囲の瑞垣屋根破損について。実地調査の結果、瓦の全面書き替えではなく、必要部分を直すこととなり、六月に修繕を終了した。併せて神楽殿の縁廻りについても、腐食した木部の修理を完

了することができた。皆様の御寄附御奉賛に心より感謝申し上げます。

### 発足三十年の太々神楽保存会

DVDに記録——高崎市文化課



内で行われた。保存会は昭和61年に発足、毎年春・秋の大祭に神楽を奉奏している。写真は平成28年春季大祭で「稲荷種蒔の舞」。高崎市では伝統芸能の保存継承を目的に、市域に伝わる神楽舞の撮影記録事業を行っている。6月26日、太々神楽の舞・囃子の記録撮影が参集殿

### 境内神饌田 実りの秋

今年六月二十八日に御田植祭を執行。総代会を始め、近隣の氏子、倉賀野中生徒有志が奉仕した。抜穂祭（稲刈りの儀式）は十月十三日を予定している。十月十九日の秋の大祭に、たわ

### 随想 研 く（つとめはげむ）

倉賀野神社総代会長 高橋義明

去年の暮、ある会議の懇親会で、見知らぬ人から声をかけられた。「一緒にしませんか」

互いに皆とは違った色のグラスを持っていた。お酒をのむ人の邪魔にならないよう部屋の隅に席を移した。

彼、甘木さんは剣道の高段者だった。礼法・着装、姿勢・態度、構え・攻め、間合い、技、残心、風格・気位。これらの稽古のことを門外漢の私にも分かり易く話してくれた。

私の話す古武道の「歩み」「武の舞」も変わらぬ態度で、真面目に聞いていた。産土神社でのご奉仕の話になると身を乗り出して、今度お会いする時にはそちらの方のことをお聞かせ下さいと言った。そして少し考えるようになりかを手帳に書き入れて、破って二つ折りにして渡してくれた。

秋は祭りの季節です。神は人に祭られることによって霊威を増し人はその霊威に恩恵をこうむるという。祭りは豊穰を祈り、収穫を神に報告し感謝するものだった。



平成13年の敬宮愛子内親王様御誕生を奉祝して、翌14年の夏、境内に神饌田が新設された。

わの御初穂をお供えするのである。

### 隣県神社参拝研修を実施 総代会

七月二十三日、神社総代会の隣県神社参拝一日研修がおこなわれた。訪ねたのは長野県安曇野市の穂高神社と、松本市の深志神社の二社。

先ず穂高神社に一行十九名が正式参拝。ことし五月に斎行された七年に一度の式年遷宮祭についてお話を聞いた。境内の御船会館もご案内いただき、「御船祭り」の穂高人形を見学。その後大王わさび農場にも立ち寄った。

信州蕎麦を堪能してからバスは松本市街地に入り、深志神社に到着。武の神建御名方富命と学問の神菅原道真公をおまつりする文武両道の神社である。折しも例大祭「天神祭り」当日にあたり、「元禄神輿」発御の召立儀式や、十六台の舞台（山車）が次々に出発していく様を間近に拝観した。参加した

時代が移り、家内安全、商売繁盛といった個人の願い、誓い。地域の安心、安全。国の安寧、災難除けをも、宮司さんに仲を執りもつていただき神にお祈り、お願いをするようになりました。欲張りになったのではなく、氏子、崇敬者すべての人々が神の御加護をどの考えです。厳粛な神祭りが終わると直会がある。

神に供えた物、神に供えたと同じ物を飲食する。神の召し上がる物を神とともに食べる。それによって神の偉大な霊力を身につけることが出来るという儀式です。

甘木さんの手帳を破っての紙片には一文字だけ「斌」ひんと書いてあった。外面の美しさと内面の実質がともなうという意味である。武道で心と技を同じように鍛え磨くよう教えられる。武士道の世界の人からの伝言、どう解釈するか迷っている。

祭りは伝統と文化だという。神を讃え、もてなし、畏れ、崇め、なだめ、鎮める。受け継ぎ、守り、伝えていく。作法、所作、心。を研ぎ続けなければならぬ。

総代会は「お祭りの日にお詣りし、見学もできて、本当によかった。倉賀野神社の祭りも盛り上げていきたい」と話していた。



深志神社の例大祭。各町の舞台（山車）が一台ずつお祓いを受けて出発していく。

### 八月七日「よい子の七夕祭り」

親子で短冊や折り紙を作り、青竹に飾った。御社殿の前で神事を行い、「たなばたさま」の歌をいっしょに奉唱。境内のすいか割りに歓声が上がった。

七夕は、天の川をはさんだ織姫星と彦星のお話から、女子の裁縫の上達を祈ることにつながり、やがて子供たちの手習いの上達を願う習俗が江戸時代になり広まったという。

